

P・J・ハニー著

『北ベトナムの共産主義』

— 中ソ論争におけるその役割 —

P. J. Honey, *Communism in North Vietnam; its Role in the Sino-Soviet Dispute*, Cambridge, Massachusetts, M. I. T. Press, 1963, 207 p.

I

かつて Honey は「現在共産主義陣営に属する国々の中で最も知られていないのが北ベトナムである」と言い、「アメリカは南ベトナムに資金・物資・武器・技術者、そして最近では兵力さえも注入しているのに肝心の戦う相手についてはまったく無知である」と嘆いたが、北ベトナムを知らないという点ではわが国も西欧諸国もアメリカと大差ない。いうまでもなく資料入手の困難なことがこの国に対する関心を妨げてきたのであり、植民地政策と密接な関係をもつ伝統的なフランスの研究がとだえて後、若手研究者の目はまったくこの地域に向けられなくなってしまったのである。実際、現在の北ベトナムについて権威ある発言ができるのは B. Fall, W. Burchett など数人にすぎない。もっとも、北ベトナムが国内の地固めに専念していた間はそれでもすんだのかもしれない。しかし、最近のように一方では南ベトナム政府をおびやかしているベトコンとの関係において、また他方では中ソ論争との関連においてこの国が注目を浴びようになったとき、発言がもっぱらジャーナリストに限られているのを見るとすぐれた研究者の輩出の必要性が改めて痛感されるのである。

したがって、このようなときに、Joseph Olsop によって“文字どおりベトナム問題の唯一の権威”と評された Honey が、歴史家の立場から北ベトナムの内政・外交を国家存在の全期間にわたって分析したのは、きわめてタイムリーであったというべきであろう。かれの結論は平凡だが、豊富な資料を駆使しての議論の展開過程ではいくつもの注目すべき指摘が行なわれている。

II

まず第1章では現在に至るまで北ベトナムの政策に影響を与え、今後も与え続けるであろうと思われるファクターが列挙されている。

第1にあげなければならないのは、北ベトナムの地理的な位置である。ベトナムは中国という大国に長い国境をもって接しているが、著者によると、このことがベトナム人に根強い中国恐怖感を植えつけ、かれらに独特な態度をしいることになった。すなわち、ベトナム人はその長い歴史を通じて、中国がかれらの生活をおびやかすような行動に出るのを極度に警戒し、その機先を制するのにきゅうきゅうとしてきた。歴代の為政者たちが中国を宗主国として認め、定期的に中国皇帝に貢物を献ずるというような卑屈な態度をとってきたのも、そのためであるという。中国に共産主義政権が確立された後でさえ中国をどう扱うかという問題は依然としてベトナム人の頭を悩ませている。「共産主義という共通の政治的教義をもつとはいえ、北ベトナムの人々が中国人の性質について幻想をいだいたことはほとんどない」(p. 3)。もちろん、ベトナム人が中国人に対し、憎しみや恐れ感情だけをもっているわけではない。「たぶん、ベトナム人は世界中で最も皮膚の色を意識する民族である。そしてこの点で中国人は嫌悪感を起こさせない程度には人種的に類似している」(p. 4)。

国が南北に2分されているというきびしい現実がまた別のファクターをなす。ジュネーブ会議の結果は北のコムニストたちが期待したよりもはるかに悪いものであった。そこで、かれらは国家統一の選挙に最後の望みをかけるが、南の反対で実施に至らない。やむをえず、かれらは武力によって南を奪回しようとする。だが北の行なうあらゆる試みに対してはそれを抑えるに必要なだけのアメリカの援助が南に与えられる。かくて、南北ベトナムの関係は中国と台湾の関係に酷似してくる。アメリカに対する共通の憎しみから北ベトナムは中国に同情を感じる。南北の分割から生まれるもう一つの結果は、南ベトナムの世論の支持を得る必要上、北ベトナムの指導者たちはそれを刺激するようないかなる過激な国内政策をもとれないということである。

第3のファクターとして著者は北ベトナムの経済情勢をあげている。周知のように国土の二分の結果、肥沃なメコン河流域のデルタ地帯との交流を遮断された北ベトナムは、慢性的な食糧不足に悩まされてきた。これを解決するには、できるかぎりの短期間に近代工業をうち立て、その生産物の輸出によって外貨をかせぎ、これを食糧の輸入にあてる以外にない。だが、北ベトナムが工業化を実施するには外国からばく大な援助を仰がねばならない。そして北ベトナムの欲するような質と量の援助を

提供できるのはソ連のみである。「他に理由がないとしたら、まさにこのために北ベトナムはソ連と友好関係を保つ必要があったのだ」(p. 11)。

第4に中国的コムニズムの経験からくるものがある。建国の初期における中国からの軍事的・経済的援助は当然ながら政治的影響を伴った。しかも当時、多くのベトナム人にはマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの理論よりも毛沢東の斬新な理論のほうがいっそう現実に適用しうるように思われた。そのため国内の政策はまったく中国の政策の繰り返しにすぎなかったという。しかし、中国の指導の下に強引に実行された土地改革は多くの行きすぎを生み、1956年には農民の暴動にまで発展した。さらに中国に範をとった百家争鳴運動もわずか数カ月で挫折する。この二つの失敗は中国の政策に対する懐疑を生むに十分であった。「中国の政策に対するこのような懐疑は中ソ論争におけるベトナム人の態度・行動に影響を及ぼすにちがいない」(p. 14)。

以上が北ベトナムのポリシーに影響を与える主要なファクターであり、これらが党の指導者たちの政治的傾向とかれらが党内にもつ勢力とにからみ合って実際の政策が形造られるという。著者は、特に指導者間の対立を重視し、第2章でそれを扱っている。

北ベトナムの政治を事実上掌握しているのは労働党政治局の11人の常任メンバーである。その色分けはHoneyによるとつぎのとおりである。

中立派または不明なもの——Ho Chi Minh (大統領),
Hoang Van Hoan,

親ソ派——Pham Van Dong (首相), Vo Nguyen Giap (国防相), Le Thanh Nghi, Pham Hung, Le Duan (党第1書記)。

親中派——Truong Chinh (国会常任委員会議長),
Nguyen Duy Trinh, Nguyen Chi Thanh, Le Duc Tho.

この中でHoに次ぐ実行者とみられるのはDuan, Dong, Giap, Chinh の4人である。しかし、Dong は党内に自己の勢力を築いていないので除外すると、結局以前より対立の伝えられる親ソ派の Giap と親中派の Chinh, および党第1書記という要職にある Duan の3人の権力争いの帰趨が今後の政策を方向づける。

III

3章、4章、5章ではフランスとの開戦(1946年12月)から劉少奇の訪問(1963年5月)に至るまでの波瀾に満ちた内政・外交の動きが執拗に追求されている。紙面の

都合上それを詳述することはできないので、ここでは北ベトナムの中国・ソ連に対する関係を理解する場合に重要だと思われるいくつかの点を記すにとどめたい。

著者によると、北ベトナムでは独立から1956年末まで中国の影響が支配的であった。それは特に、フランスとの戦いが長引くにつれて北ベトナムがますます中国の軍事的・経済的援助に依存しなければならなかったということと関連する。この頃、ソ連はまだベトナム人にとって地理的・人種的・文化的に遠い国に思われていた。ジュネーブ協定による休戦の後でも中国の影響は依然減ずることはなかった。戦争で受けた破壊の復興に中国の労務監督・技術者・用具・食料・衣料などが必要とされたからである。しかし、このような状態は1956年で終わったという。それは、一方で中国をモデルにした土地改革・百家争鳴運動の挫折からくる中国模倣に対する反省、他方では北ベトナムが新しい経済の段階にさしかかったことによる。すなわち、1958年より経済・文化発展3年計画がスタートするが、その遂行に必要な質の高い経済・技術援助はこれをソ連・東欧に仰がねばならない。したがって、すでに1956年の末頃から中国→ソ連への切り替えの準備が始まり、1957年いっぱいそのために費された。この切り替えを示す資料として著者は、William Kaye が“A bowl of rice divided”という論文の中で発表した数字を引用している。これによると1955~57年に中国が贈与・クレジットを合わせて2億ドル、ソ連・東欧が1.195億ドルを与えているが、1958~60年になるとそれぞれ1億ドル、1.59億ドルと比重が逆転しているのである。このような切り替えを北ベトナムは中国の感情を害せず巧妙に行なうことができた。しかし国内では、Truong Chinh を先頭とする親中派を刺激した。著者は1957年の後半、この問題にからんで指導者の間に深刻な対立があったと推測し、ヴォロシーロフ訪越の際の冷たい待遇、Ho Chi Minh 訪ソに関する秘密、Giap のゆくえ不明など、なぞに満ちた諸事件をその証拠としてあげているが、この年には周知のようにソ連でもマレンコフなどのスターリン派とフルシチョフ派との対立がクライマックスに達していたことを考えると、単なる偶然の一致とは思えない。

しかし、ともかく1957年にバランスを獲得してからは北ベトナムは一貫して中・ソのいずれにもつかない中立的な立場を守っているという。もちろん、外の世界には北ベトナムが中・ソのいずれかの支持に傾いたかのような印象を与えるいくつかの事件があった。たとえば、1960

年2月のワルシャワ条約会議——この席で中・ソ対立の深さが明らかとなった——の後、ソ連の平和共存政策に関する言及がまったくなくなった。そのため西側の観測者は北ベトナムがこれを境に中国支持にまわったと判断している。また、1963年の劉少奇訪問の際の中国政策称賛も中国支持を表わしているように思われる。他方、1960年9月の第3回労働党大会におけるソ連賛辞に満ちた演説はソ連側についたような印象を与える。しかし、著者によるとこのような判断はいずれも北ベトナムが中・ソとの関係で身につけた外交上のテクニックを無視したものであって正しくないという。その外交上のテクニックとは訪問中の外国代表にはどこの国から来ようと最大限の賛辞を呈するというものであり、中・ソからの圧迫にはただ言葉の上だけで支持を与え、実際にはいかなる行動もとらないというものである。著者は性急な判断をするジャーナリストをつぎのように批判している。「西側の観測者たちはそのときの最重要な問題に関し、中・ソのいずれの主張を支持し、攻撃するかによって、ある党が親中的か親ソ的かに分ける技術を見つけた。かれらはこの方法によって他の多くの党を正しく分類できたが、ベトナム労働党を判定する場合には誤った。それはかれらの技術では、ある党が中立的な立場をとりうるという可能性を説明できなかったからである」(p. 75)。

年とともに悪化しつつある食糧不足という国内問題と南ベトナムにおけるゲリラ戦の長期化という対外的な問題は北ベトナムをして中・ソのいずれか一方につくことを不可能にしている。中・ソ対立に関する北ベトナムの基本的態度は「両国間の最終的な取り返しのつかないような断交を回避するというものである」(p. 175)。しかし、もし北ベトナムが恐れるような最悪の事態がきた場合には、地理的な位置からして中国側へ徐々に傾かざるをえないであろう。

IV

以上重点的に内容を紹介したが、中ソの間にはさまれた北ベトナムの外交政策のとりうる限界を明らかにし、国内にかかえた困難の深さを指摘した点に本書の価値があると思う。実際、隣の中国では毛沢東がすぐれた後継者を得て政治活動の第一線から退き、もっぱら理論の深化に没頭できる余裕をみせているとき、70歳を越え、しばしば病を伝えられる Ho Chi Minh がなおも第一線で陣頭指揮に立たねばならないところに北ベトナムの苦悩が現われているといえよう。しかし、このことは、逆に

今なお Ho が国民の間で圧倒的な支持を得ていることを意味し、理論家としてまた実践家として、かれがもつたぐいまれな才能が、いまさらながらわれわれを驚かさせる。著者は1960年のモスクワ共産党会議において Ho が中・ソの仲裁者としてその和解に努力したと述べている。もしこのような事実があったとすると、かれがあえてその役をかって出たのは、著者の言うように自国のために中・ソの決裂を防がねばならないという追いつめられた立場からであったといえようが、中ソの首脳の説得にまわられるような実力者が他の国にはいなかったという事柄もあったかもしれない。いずれにせよ、現在の社会主義国の指導者の中で Ho ほど国際感覚を身につけている者はいない。国際共産主義運動の分極化が著しく、アジアとヨーロッパの共産主義の違いまで云々される今日、フランス共産党の設立に参加し、モスクワで理論的な洗礼を受け、中国で永年実践活動に従事した Ho の思想をわれわれはもっと研究してみる必要があるのではないか。そこから中ソ対立を理解する一つのかぎが得られるのではないか。本書を読んで特にその感を強くした。

最後に、著者の見解に対する疑問を二つほどあげておく。

まず気になるのは、Honey が南のゴ政権あるいはそれに代わる政権が、アメリカの強力な後押しによって北ベトナムに恐怖を与え続けるであろうという前提に立って話を進めていることである。しかし周知のように、ゴ政府は仏教徒弾圧という愚策から自らその首をくくり、その後つぎつぎに代わる政府もまったく民衆の支持を失っている。国内には統一された秩序というものはなく、北ベトナムに脅威を与えるところではない。事態はまったく著者が予想だにしていなかった方向に進んでいるのである。それをかれが予想できなかったのは、南ベトナムの民衆の国家統一への本能的な志向をまったく無視し、あるものは共産主義に対する恐れだけであるときめてかかったためである。ベトコンを北からの差し金と簡単に割り切っていることを見てもそれは明らかだ。

第2に、ベトナムの対フランス独立戦争に関する評価が疑問である。Honey は第2次大戦で消耗しきったフランスに対して単独で独立をかちえた中国の援助を受けたのは、結果的にはアメリカの介入を招き犠牲を多くしただけであったという。しかし、後にアルジェリアであれほど頑強な抵抗をみせたフランスがインドシナをそうやすやすと手離したとはどうしても思えないのである。

(図書資料部 村野 勉)